

きっかけなんて、何でも良い？

国立病院機構岡山医療センター 新生児科 玉井 圭

突然ですが、私が医師を志したのは、放射線技師である父から「医者モチるぞ」と言われたからです。ごく平凡な私でも、医師になれば安定した生活が送れて、かつモチるかもしれない、という邪な思いで医学部受験を決めました。そんな私ですから、医師になってからも臨床医として働くことには喜びを感じていましたが、研究や論文については全く興味がありませんでした。ただ、そんな私でも最近では毎年英語論文を投稿するようになっています。そのおかげで、このようなリレーエッセイを書かせて頂くような機会にも恵まれたのだと思います。そのような私の新生児科医としてのキャリアを振り返ってみると、転機になったのは「佐多フェローシップ」といえるかもしれません。佐多フェローシップについて、ご存じない方に向けて簡単に説明しますと、株式会社東機質の佐多社長と英国 King's College Hospital Anne Greenough 教授のご厚意により、London の King's College Hospital において、3 か月間の新生児研究研修の留学助成を行っており、そのことを佐多フェローシップといいます。私が佐多フェローシップに「最初に」チャレンジしたのは 2015 年です。応募者がいないから誰かいませんか？という問い合わせが私の上司の所がありました。ちょっとやってみようかな、と軽い気持ちで履歴書を送りましたが、残念ながら落選しました。翌年も落選したので一旦諦めていました。ところが、2017 年に事務局から連絡があって「今年は希望者がいないから先生どうですか？」と言われました。理由はどうか、そこで念願の佐多フェローシップに参加できることになりました。そして渡英まで時間があつたので、自己紹介のつもりで症例報告だけでも英語論文を書きたい、と思って論文執筆に取り組みました。初めての論文がアクセプトされた時の喜びは、臨床で感じるものとはまた違う種類のものでした。それから何本も論文を書きましたが、アクセプトの瞬間はこの時が一番興奮したことを覚えています。残念ながら臨床研究に関しては佐多フェローシップで目に見える成果をあげることはできなかったのですが、その頃から研究や英語論文への興味が一気に出てきました。臨床にしか興味がなく、上司から研究テーマを与えられても一切論文執筆には手を付けてこなかった私にとっては、大きな変化でした。長々と書きましたが、私個人としては「きっかけは何でも良い」と思っています。モチたい盛りの私に言葉をかけてくれた父、応募者がいないということで参加できた佐多フェローシップ、自己紹介のつもりで書いたけどイギリス人には全く興味を持たれなかった英語論文。どれもが輝かしいものではありませんが、今の私にとってはつながっているように思います。若い先生方にもそれぞれのきっかけやチャンスがあると思います。それらを是非とも楽しみながら、色々なことにチャレンジして、医師として成長してもらいたいと思います。

〔著者略歴〕 玉井 圭 (たまい けい)

学歴

2006 年 岡山大学医学部医学科卒業

2017 年 11 月～2018 年 1 月 佐多フェローシップ (King's College Hospital)

2019～2022 年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 小児医科学 博士課程

職歴

2006 年 松山赤十字病院

2009 年 岡山赤十字病院

2010 年 岡山大学病院

2011 年 大阪母子医療センター

2013 年 国立病院機構岡山医療センター

小児科専門医・指導医、周産期専門医（新生児）・指導医、新生児蘇生法インストラクター、新生児シミュレーション普及推進ワーキンググループ (NSim WG)

～DEI 推進委員会より～

計画的偶発性を活かした自己成長

クランボルツの「計画的偶発性理論」では、キャリアの約 8 割は予期せぬ出来事によって形成されるとされています。そして、その偶然をチャンスに変えるには、好奇心・持続性・柔軟性・楽観性・冒険心という五つの姿勢が鍵になると言います。「応募者がいないから」という偶然からの佐多フェローシップ参加、「自己紹介のつもり」で書いた初めての英語論文——玉井先生は好奇心と冒険心で一步踏み出したことで、キャリアを切り拓いてくれました。

偶然を行動でつかめば、チャンスは確かな成長へと変わる。どんな立場・背景を持つ人にも、チャンスの芽は宿っています。「きっかけは何でも良い」は、あなたの芽に気づかせてくれる言葉かもしれません。

責任編集
DEI 推進委員会